

# 辰野金吾（たつのきんご）1/2

～ヨーロッパ風日本建築の開祖～

金吾は、安政元年（1845年）唐津城下坊主町の姫松倉右衛門、母まつひめまつくら えもんの次男として生まれました。五歳のころ、子どもがいなかった叔父の辰野宗安たつのむねやすの養子になりましたが、成人までは姫松家で育てられました。

母は、やさしいけれど、しつけに厳しい人でした。7歳になった金吾に、母は、日課として、家から200メートルほど離れた井戸からの水くみを命じました。家で毎日使う水がめを一杯にするためには、5、6回往復しなければなりません。体が小さくひ弱な金吾にとっては重労働でとてもつらいことでした。母は、「このくらいのつらいことで弱音をはくようでは先が思いやられます。どんなにきつくても辛抱して、言われたことを成し遂げるよう努力しなさい。」と言って、水くみを続けさせました。水くみの仕事が終わると、机の前に座り勉強にはげみました。

15才になった金吾は、唐津藩の鉄砲隊に勤めることになりました。体が小さく見るからに弱々しい金吾は、先輩たちにとっては格好のいじめの対象に見えました。しかし、毎日夜おそくまで勉強していろいろなことをよく知っている金吾に、先輩たちは、分からないことがあると教えてもらわねばなりません。聞かれたことには親切に、ていねいに分かり易く教えたので先輩たちも、いじめたり意地悪をしたりするわけにもいかず、仲良く一緒に仕事をするようになりました。

明治維新により新しい時代が始まりました。唐津藩でも時代に遅れないようヨーロッパの文化を取り入れるため、英語学校が設立されました。先生として18才の高橋是清が招かれました。後の総理大臣となった人でした。金吾は英語を学ぶうちに、上京して西洋の学問をもっと勉強したいと思うようになりました。

当時政府は、これからの日本を支えていくような優秀な人材づくりに力を注いでいました。工部省では、工学寮（今の東京大学、工学部）を設け、明治6年（1873年）第1回目の生徒を募集しました。募集人員は40人で、全国各地から選ばれた秀才たち100人が受験しました。19才の金吾はだれにも負けない自信をもって受験しましたが、むずかしい問題が多かったため、落ちたと思っていましたが、40人中40番目、ギリで合格していました。

金吾は、人並みについていくには、人の2倍も3倍も努力しなければと少しのひまも惜しんで勉強に励み、6年間の修学期間も終わり卒業試験を迎えました。卒業試験の論文は「日本の将来の建築」、製図は「和洋折衷の学校建物」でした。日ごろの努力の結果、1番の成績で卒業することができ、金吾は喜びをかみしめながら7年ぶりにふるさと唐津に帰りました。

そして金吾には、工部省からイギリスへ留学するよう通知がありました。明治13年（1880年）イギリスへ渡り、建築学を学び、実地研修として、フランス、イタリアの建築物を見て回りました。

～2/2へつづく～

分野 人物

地域 唐津

◎地図・写真・統計資料など



辰野 金吾  
(1854～1919)



旧唐津小学校の図  
辰野金吾が設計しました

(『郷土につくした人々』より)

◎引用・参考文献（出典）

◆『郷土につくした人々』  
～ふるさと唐津の偉人たち～

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ  
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467